妖變面影

特56
77

254
115

愛媛面影卷三

今治　半井法橋梧菴撰

風早郡　古ハ風速と書ク

日本紀曰風速國造者輕島豐明朝御代物部連祖伊香色男命四世孫阿佐利定賜國造

日本書紀持統卷曰伊豫國風速郡物部藥與肥後國皮石郡壬生諸石并賜人絁四匹絲十絇布二十端鍬二十口稻一千束水田四町復戶調役以慰久苦唐地

續日本後紀曰承和六年十月癸未伊豫國人外從五位下風早直豊

明治 44. 1. 10 内交

宗等一烟賜姓善友朝臣并除邊籍貫附左京四條二坊天津饒速日命之後也

文德實録曰天安二年八月戊戌内供奉十禪師傳燈大法師位光定卒光定俗姓贄氏伊豫國風早郡人也及至弱冠遭父母喪服闋離俗隱居山林大同初向京輦于時有聞叡山最澄大法師心特慈悲傳止觀宗三年攀陳住止觀院値衆徒屈義真和尚以爲座主令講摩訶止觀得預聽最澄大法師相悲慰勞五年春正月十四日宮中齋會蒙制得度天台之度者從此爲濫觴弘仁三年夏四月十八日東大寺戒壇受持具足戒其後敬問大師學習宗義五年至興福寺與義延法師共論大衍宗義頗有優美之稱帝屢令光定與散位從五位下真苑宿禰離物對論經義彼此相難頗致俳優帝時以爲戲弄之事最澄上建大乘戒壇之奏僧綱相共難論仍付光定逐却十三年六月四日最澄卒後殊被許傳戒此光定内供奉之力也帝聞光定在山資用絶乏別賜乞食俵濟山中之急承和五年四月二日叙傳燈大法師位仁壽四年奉制起四院天安二年秋七月帝聞年滿八十恩賞殊異施度者八人縑八疋調布高布交易布各八十段綿八十疔錢八万貫米八十石病卒時年八十臈卅七光定爲人質直不事服飾帝悅其質素殊加憐遇

三代實録云貞觀二年十月三日己卯正五位下行典藥正兼侍醫參河權守物部朝臣廣泉卒廣泉者左京人也本伊豫國風速郡姓物部首後隷京兆賜姓朝臣廣泉少學醫術多見方書天長四年四月爲醫

博士兼典薬允遷為侍醫後累遷伊豫讃岐掾侍醫如故十四年
授従五位下兼伊豫掾仁壽四年授従五位上為肥前介内薬正侍醫如
故天安三年兼參河權介貞觀元年冬授正五位下轉參河權守内
薬正侍醫如故廣泉薬石之道當時獨歩齢至老境髪鬚眉皎白皮
膚悅澤氣猶強卒時七十六撰摂養要決九卷行於世矣
類聚国史五十四人部十節婦云天長七年六月乙丑節婦伊豫國人風早直益吉女
叙位二階終身免其户田租益吉夫死後攀慕不止落飾歸真節
操難奪所以叙之位階用旌貞潔也

○和名抄郷名

栗井郷（アハヰノサト）　河野郷（カハノノ）　高田郷（タカタノ）　難波郷（ナニハノ）

那賀郷（ナカノ）

昔八此五郷なりしと後ハ拾四村に分とも

浅海本谷村 二百七石余　浅海原村 百七十九石余　下難波村 六百五十三石余　中通村 七百五石余
上難波村 百一石余　庄村 四百五十三石余　萩原村 廿七石余　尾儀原村 六十三石余
猿川原村 百四石余　小山田村 三百五十石余　中村 百九石余　儀式村 二百十石余
庄符村 二百八石余　米野村 百七十石余　九川村 廿四石余　上總村 十五石余
梅木村 廿四石余　小屋村 五石余　神次郎村 九十四石余　恩地村 三十五石余
城山村 七十七石余　柳谷村 百八十石余　閏谷村 十七石余　猪木村 三十三石余
滝本村 九十四石余　猿川村 三百三十六石余　才原村 百七十石余　湯山村 九石余
院内村 百六十九石余　横谷村 八十石余　大河内村 四十石余　牛谷村 四十石余

林鹿村　百廿石余　菅澤村　二百五十九石余　容村　百七十五石余　西谷村　二百十二石余
大西谷村　六十石余　本谷村　二百十二石余　早林村　六十七石余　小川谷村　八十三石余
伐古村　二百廿二石余　高山村　二百十八石余　善應寺村　四百八十五石余　宮内村　百十二石余
寺谷村　百三十石余　波田村　二百一石余　神田村　百廿六石余　八反地村　八百石余
中西外村　九百三十七石余　中西内村　三百五十六石余　北條村　四百十七石余　辻村　六百九十六石余
土手内村　九十六石余　別府村　九百九十四石余　常保免村　百六石余　片山村　百四十四石余
中須賀村　百八十七石余　夏目村　三百十石余　苞木村　二百五十石余　常竹村　百一石余
久保村　九十五石余　鹿峯村　百三十九石余　河原村　百三十五石余　和田村　百六十五石余
安岡村　六十石余　鴨池村　四十九石余　磯河内村　二百六十七石余　小川村　三百六石余
野忽那嶋　六十八石余　無須喜嶋　三百三十石余　粟井村　百五十二石余　忽那島内　小濱村　二百十六石余　同上

大浦村　四百八十五石余　同上　長師村　二百十六石余　同上　宮野村　百五十八石余　同上　神浦村　二百十五石余　同上
宇和間村　百三十八石余　同上　熊田村　百十八石余　同上　吉木村　百九十七石余　同上　饒村　百四十五石余　同上
田火里村　六十三石余　同上　怒和嶋　二百十八石余　津和地島　百十石余　二神嶋　八十二石余

總高壹萬七千六百三拾五石八斗五升六合

○烏帽子山城墟

下雜波村より一名冠山山頂より黒岩有て遠望ハ烏帽子の如し
国々に赤橋氏藏寺時の長子重時と云人の城跡なり
南北太平記云伊豫國立烏帽子城小條重時土居得能が兵と為て
岩ゝ紫河内の朝敵に亡ぬと云ハ今親ゝ名者

忽約を変じ敵となる為なれば城に兵少くなりぬれば土居得難時を移さず一万余騎を押寄せば合も強ぶる神も頼まる

金子五郎左衛門敵と無二に土居を城中へ入れば重時郎従十八人自害して果てぬ

○恵良城墟

下雑渡村の山上なり応永月六郎左衛門と云人の城なり其後河野十八将の一人得居半右衛門これを守る云々

南海治乱記曰細川頼之大兵を発して豫州に攻入る先勢田山の城を圍む河野通朝防戦して相守る数十日に至る城中に野心の者出来て通朝を自殺せしめ世田山城陥る夫より兵を進て温湯城に至る此城は通朝が嫡子徳若丸通堯が守る処なり二月二日細川方の先陣温湯城に取かけ矢合あり頼之は阿淡の兵一万人を以て道後大室と云処に至て陣を居河野が盛力の通路を絶て謀を回す國中の兵士河野を捨て頼之に服する者多し河野通堯與力を奪はれ温湯城を守る得ず捨て高縄城に入る大敵と防戦不相叶捨て恵良城に入る

○腰折山

冠山の麓に在り二名集には冠山のうすもいとでもあり

豫陽盛衰記に小野小町の歌とて

いとゝ湯の花のよりひるき風早の腰折山とそなつかしき

按此歌の詞首尾とゝのひ俚諺集に二句ひいきまれたまとも

おのれかまくらひるまの浦のうらんうきもかの色波人の陰作

まそ小野の宰ちかまくらの

○風早浦

此ちかまくら汐の早き所にて紅葉へ下る拾遺の雅俗寺名所

和爾雅三才圖會に曰ハ風早鳴門

萬葉集卷十五風早浦舶泊之夜作歌

和我由恵仁妹奈氣久良之風早能宇良能放伎敝爾

奇里多祭姚家利

後堀川百首

風早の鳴戸の浦の船のかくれ定めぬ波の音ぞ

二名集云万葉拾穂抄ニ風速浦和名抄ニ安藝國高田郡ニ云或説ニ

駿河ト云ハ此奇ハ新羅使の道ノ歌ハ安藝国ノ歌ト云

今按ニ風早郡前海ニ向ヒ安藝の島ニ面国北國

往来の通路ニ万葉新羅使の歌ハ伊豫の風早ノ後堀

川百首の奇ハ風早の鳴戸浦ニ伊豫ニ定ム

按代匠記ニ備後國ニ万葉の文例ヲ考ニ備後國水調郡

長井浦舶泊之時作歌ニ次ニ風早の歌ハ其次ニ安藝國

長門島舶泊磯邊作歌ハ備後国ニ今備

後ニ風早浦ハ安藝も伊豫も備後ニ程近ケレバ

安藝國の所ニ入ルヲ誤リテ前ニ出ル若ハ伊豫国ニ云事の

脱ヵ

○北條

濱名の一在所なり河野親孝の住なり親孝北條大夫と称す

因て此を小條と云と俚諺集に云へり

按南北太平記に伊豫國立烏帽子城北條重時土居得能が

兵を支て居りなどと云へり疑らくは此小條が住所なんか

○國津比古命神社

延喜式に風早郡國津比古神社と云へり祭る所は廿四社考に櫛玉

饒速日命也俗に頭日神社と云御社八反地村に立せり

按姓氏録に左京神別越智直神饒速日命之後也と云へり又

續日本後紀に伊豫國人外従五位下風早直豊宗等天津饒速

日命之後也と云へり此國津比古神八即越智氏風早氏

等の始祖と氏神と齋祀る所也

○櫛玉比賣神社

延喜式に風早郡櫛玉比女神社と云へり御社八國津比古神社と同

所に向合て立せり祭る所は廿四社考に神饒速日命之妃天道日

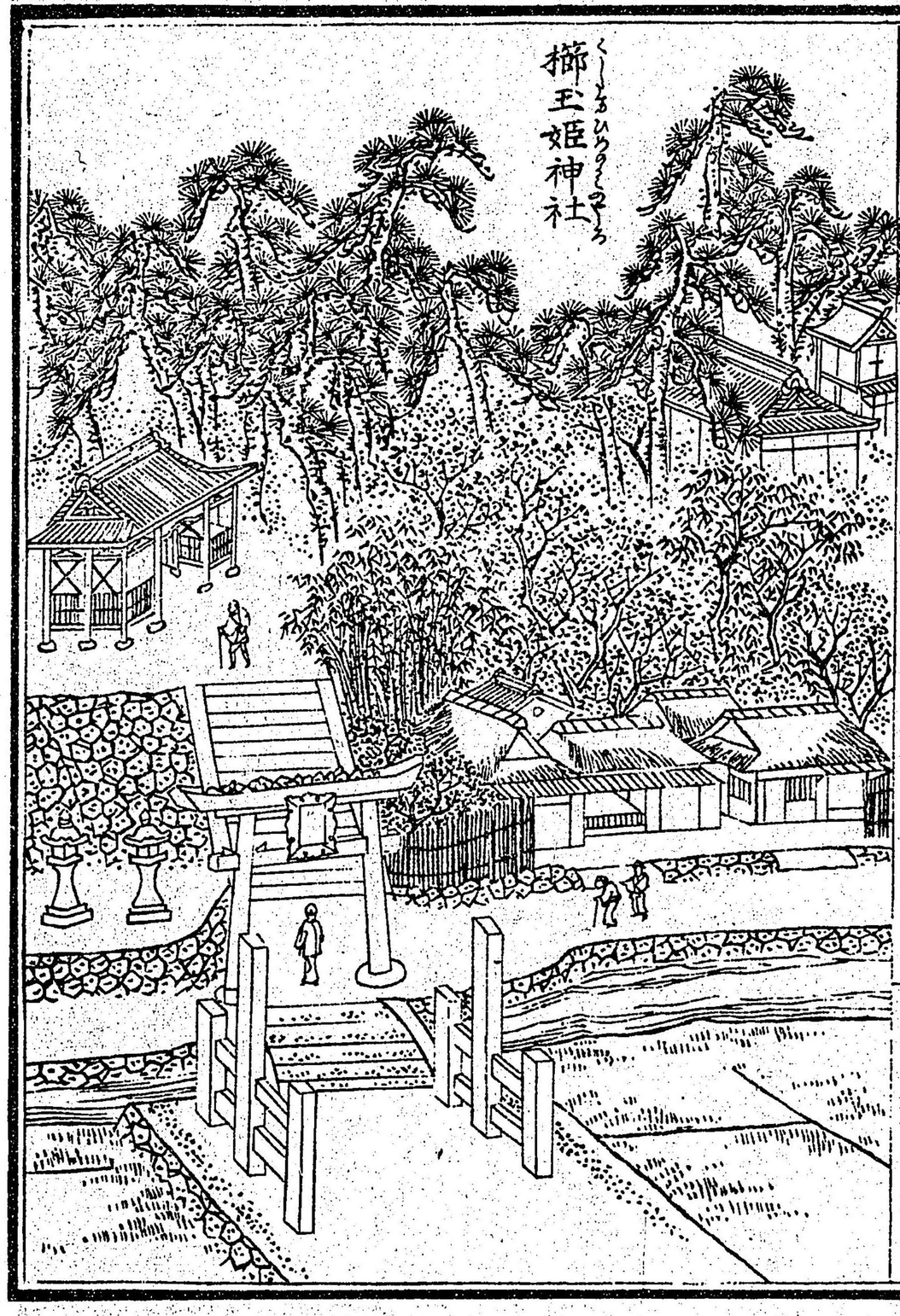
女也頭日道日音相近因秋吉之則櫛玉固男神之稱而頭日今女神之

号也蓋先正以夫婦合德之義更互而稱之歟と云へり

大成云廿四社考の説いと疑し大和國廣瀬郡櫛玉比女神社

と同神なるべし

國津彦神社


櫛玉姫神社

文德實録曰齊衡元年三月壬辰授伊豫國櫛玉姫神從五位下

○高縄神社

宮内村に在て祭る所は三島明神なりと云春枝云慶長年中に高縄山上より遷祭る所にして高縄山本社なるべし

三代實録曰貞觀五年九月廿五日授伊豫國正六位上高縄神從五位下

○高縄山

越智氏の祖高縄と云人三島明神の神託によりて此山に居住せしより高縄山と名くと豫陽盛衰記に見えたり河野家累代の城地なり此辺河野郷なるは河野氏と称するなり

按南海治亂記云其祖伊豫王子より以来越智郡に住せり故に越智姓を賜ふ夫より廿一代玉澄と云人風早郡河野郷に居住せり故に河野を以て氏とす

山頂に高縄權現祠あり俗に天神森と名く又横谷と云ふに寺あり高縄寺と号く観音像を安置す高縄観音是なり

河野家譜曰崇通清霊於一社神奉稱高縄權現後年四即通信自彫刻父尊像安置于高縄山頂後代指彼山頂号天神森是彼尊像似菅神故傳虚名歟

天慶年中に伊豫掾純友此城に籠もりと云前太平記にかくて大手搦手都合千八百余騎純友が籠る道前道後境の高縄城に押寄て鯨波をどつとぞ揚サセケル

豫章記云養和元年二月西国ヨリ平家ノ注進ニ伊豫国住人河野四郎通清ハ去年ノ冬ヨリ謀叛ヲ起當国道前道後ノ堺高縄山ニ楯籠ル間備中国住人奴可入道西寂備後鞆浦ヨリ兵船十艘押渡高縄城ニ寄セ通清ヲ討取国中并ニ阿波讃岐土佐等ヲ静ノ正月二月ノ間居住ル処ニ通清カ子息河野四郎通信高縄城ヲ忍出テ安芸國沼田郷ヨリ兵船三十艘程海士ノ釣舟ノ体ニテ浮出西寂ヲ窺フ程ニ西寂ハ不知之去三月一日宿海ニテ室高砂ノ游君ヲ集メ船遊シケル処ニ通信押寄テ西寂ヲ虜リ高縄城ヘ曳上セ張付ニシ終ニ氏又鋸ニテ頸ヲ截タリトモ云 平家物語同

○紀實平墓

猿川村神道原ト云所ニ在リ俗ニ貫之朝臣ノ墓也ト云ハ誤ル歟宇和郡土居村甲森城主紀實平ト云人都ヨリ下向ノ時猿川村ニ病死ス依テ遺骸ヲ土居村ニ送リ下谷ト云所ニ葬リ侯由宇和記ニ委ク載リ此實平ト云人貫之朝臣ノ同姓ナレバ誤傳ルヲモ

按貫之朝臣延長八年土佐守ニテ土佐ニ下給ヒ来ル歌ハ此國ニ来玉ひしるときりぶ又此山中ニ花垣里柳本ヲ云所ノ名ト貫之朝臣の詠玉ひしる哥ト豫陽盛衰記ニ載ル是皆誤傳ニテ附會シ侯ヲ明ル

又按續日本紀ニ紀博世小治田朝廷御世被遣於伊豫国博世之孫忍人便娶越智直之女生在手云ヒシ此子孫多ク此國ニ留リ

さもゞ此實平と云人も博世の子孫すゝんう

○善應寺

善應寺村ゝ在て元弘建武の頃男剛の名と得し河野九郎左衛尉通治後任對馬守通盛と改むゆ頃數代の舊領を放さと浪宰の身となるを建長寺南山和尚の弟子となるを入道して善惠と号し又對馬入道と称す師の和尚を憑み尊氏將軍ゝ申請て本領を安堵寸依て善惠入道和尚を深く尊み高縄山の麓ゝ一宇を建立して善應寺と名く北條長福寺顕正堂和尚南山の弟子なれば招請して開山とすと云此事豫章記ゝ詳なり高僧傳作崇壽寺南山和尚

將軍家古今台狀數通并河野家累代の書扎寄附狀等枚挙すゝび

○雌甲森

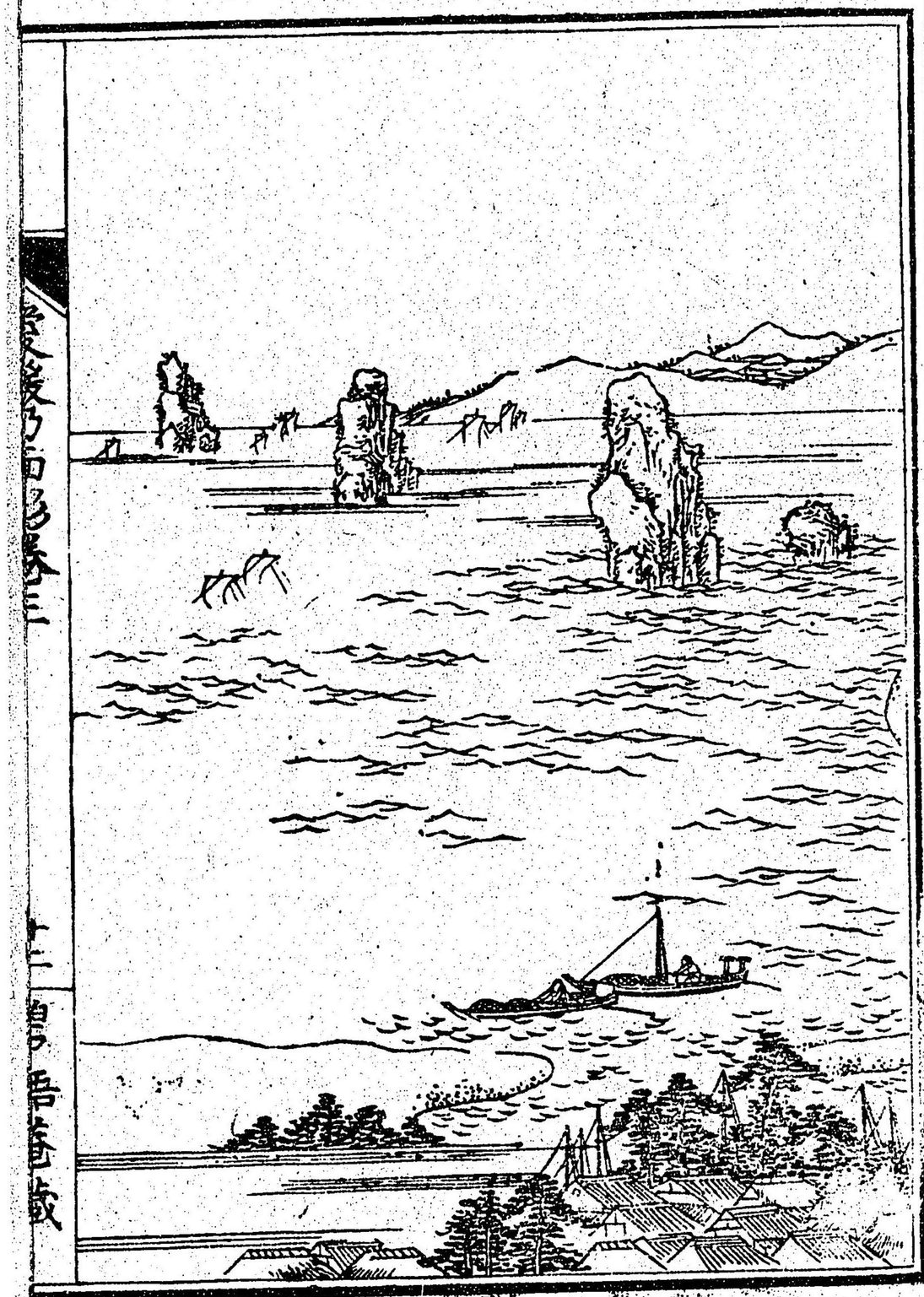
河野對馬守通盛の城跡なり此山ゝ名石なり方よ一て柱の如長五間より十間ゝ至る一山皆ちの石なりと云

○宗昌寺

八反地村ゝ在て禅宗黄蘗派なり河野親經弟北條六郎康孝子正岡信濃守經孝建立也開山大蟲禅師此郷ゝて十六箇村寺領なり今田旧記ゝ乃ると云

○忽那島

北條の沖中ゝ在り俗ゝ中嶋と云此島十二浦有り昔時二階堂信濃守民部入道此島ゝ謫居せり子孫忽那を氏とすと俚諺集ゝ見ゆ



鹿島
ノツチレ
北条

此島古昔牛馬牧ありしと村民の說によりて其事を止めしなり
延喜式兵部省云伊豫國忽那島馬牛牧
三代實録曰貞觀十八年十月十三日丙辰伊豫國言管風早郡忽那
嶋馬牛年中例貢馬四疋牛二頭其道遺馬三百餘疋牛亦准之嶋
内水草既乏蕃息滋彩青苗初生風逸蹈破羽卒變將秀群入食損
百姓之愁莫甚於斯望請撿非年貢之餘皆悉沽却以其價直混合正
稅詔從之
玄道曰天平九年二月より記せる法隆寺縁起より骨奈嶋と書しを忽
古ハコツと唱へ後より忽と唱へしなるべし
○泰山城堰

忽那島より在り忽那式部少輔と云人の城跡なり
二名集云元亀三年九月六日土州元親發大軍攻入于宇和郡伊湯
月舘式部少輔久津名通著為兵將被差向伊豫喜多両郡及
嶋方之輩八百餘騎同八日首途當城分軍於水陸進發
○鹿嶋
北條の海上より在る小島長也此島より鹿島明神の社ありて因て名
く島中より鹿多く久留嶋出雲守の塔ありて二神豊前守相
義と云人住る由二名集より見へ
此外野忽那無須喜等の嶋々皆風早郡より屬へ

○和氣郡

和名抄郷名

高尾郷（タカヲノガト）　吉原郷（ヨシハラ）　姫原郷（ヒメハラ）　大内郷（オホウチ）

廿八此四郷　今八二十二村ニ分ル

堀江村八百三十二石余　大内平田村四百八十五石余　谷村三百六十三石余　櫂現村三百五十六石余

福角村八百二十九石余　大栗村三百三十七石余吉小栗　上伊葺村百六十六石　下伊葺村五百四十四石余

祝谷村五百七十七石余　吉藤村六百七十七石余　姫原村九十石余　山越村千百八石余

長戸村千五百四十七石余　志津川村四百五十七石余　高木村三百五十七石　安城寺村千百十六石余

和氣濱村百五十五石余　太山寺村千五百廿六石余　古三津村千八十二石余　久万村五百九十六石余

興居嶋四百二石余　馬木村七百六石余

總高壹萬四千二百四拾六石壹斗二升六合

○葛籠葛城墟

堀江村ゟ在り村上内藏大輔吉高と云人の城跡なり

二名集云元亀三年九月十二日濃州織田信長公家臣山岡對馬守

子手右衛門率一千七百余騎以三好将監同右京為案内者分軍

二列漕寄于堀江濱囲當城村上吉高雖防戦力労失盡臨

半更抜落云

○花見山城墟

同所ゟ在り正平二十三年久枝四郎入道當城ゟ立籠しと湯月館を

攻撃て落城すと二名集ゟ見ゆる

○常信寺

祝谷村ゟ在り本尊釋迦如来真言宗中興天台宗ゟ改ゆる此寺蒲

生秀行朝臣の位牌ありと云

寺内ゟ四何の如きもの所ゟ里民疾病とわるゟ必奇験ある神

佛の堂舍もるゟ如何なる故とゆえびと俚諺集ゟ見ゆる

○客天神

同所ゟ在り菅公筑紫ゟ左遷の時暫此ゟ居玉ひしゟ因て客

天神と云ふ此事窪田天神の処ゟ詳なる俚諺集ゟ窪田

天神の勧請なるべしと中興再造河野通能と云へり明徳四年棟札に誌せる後加藤喜明朝臣の修覆なりしと別當飛梅山安楽寺圓盛寺と云

○三木寺城墟

同所に在り宝徳三年河野通元男大法師此城を死す白馬に駕し武者の像有て山上に安置せり俗語に愛宕権現なりと云

名集に見ゆ

俚諺集云城主犬坊丸毛馬に駕て谷より墮て死りその後祟りを為す幽魂白馬に乗て往来するを見る者必病を生ず

松山臣大膳清大夫と云人君命を蒙り甲冑を帯し薙刀の鞘を脱し馬上にて城山の梺に至り犬坊の霊を去べき君命なりと高声に述べしに白紙の如き物東に飛去り見し者其後病を生ず

○三木寺

異木三本ありしに依て三木寺と云城主犬坊善提の為建立しる由俚諺集に見ゆ

此寺の梺に岡本大明神と云社あり

按古昔帝王の御幸ありし地なるによりて御幸寺と名付られ

岡本宮八即舒明天皇を祀奉るなるべし

○軽墓

姫原村に在り小高く築立て小笹など生り即軽皇女を葬

慶安と云因て此郷を姫原と云そ

日本書紀元恭巻曰二十四年流輕大娘皇女於伊豫

○龍穂寺

山越村に在て禅宗洞家也河野家五十一代越智通直出家して剛居士号梵利と号して竜穂寺と名付自開山と号て海岸希清大和尚と稱す二名集に見ゆ此寺の宝物に蜀江錦にて縫ひ出せ立條の加衣沙衣なり

河野家数十代の石碑を建立寸延宝七年七月十五日河野家五十七世播州守佐崎河野彌大夫通正建立と誌す

○十六日櫻

竜穂寺山に在て毎年正月十六日花を開く名木なり

古事因縁集云昔此山に花を愛する翁ありて老後に及て春咲花も心せよ我齢已に八十に及へり来年咲は逢でしと恨なに獨言して立れば花忽に開く是正月十六日なり夫より今に至る毎年此日に至て必ず花を開く草木心なしといへども其愛情に感じるものとなるべく感涙を催す又世人の帝温泉に浴し給ひ序此に行幸なり給ふ来意なく還幸なり後より茶屋ぬを申す付急輦を召せ出て其の坂を今に車返坂と云と俚諺集に見り

冷泉為村卿此花を詠給ふ

神なるのそなる木樹めづらしや都のうめにまさるなりけり

慶應元年正月脇屋義一ぬし松山少將のまつ打ち賜りる
そ此花を見せ〳〵歌ふられるなる　松菴
ちれど〳〵獨さらんかなれて人言とかはれは春のそらあり

○天德寺

山越村に在り禪宗濟家也河野刑部大輔通宣建立なりと云通宣
永正十六年卒画像今猶存すと二名集に出る

○千秋寺

同所に在り萬歲山と号す禪宗黃蘗派也元禄元年戊辰歲の建
立なりといつる

○還熊八幡宮

同所に在り石清水の勸請なり旅行する人此社に詣ぬれば必恙なしと
来て信ずる人多し還熊と云名よりなるべし

○七郎明神

馬木村に在り河野七郎通運の靈を祭るなり河野通治の男
七郎〳〵云人大高次郎重成が為に討死すと太平記に出る

○阿沼美神社

延喜式に温泉郡阿沼美神社名神大〳〵にして二十四社考云所祭
神未詳在地未詳ト部兼永曰沼一本作治臨時祭式作阿治美
神社按美與女通阿治女也是則天鈿女命御名也
和氣郡平田村に一社にて近年社前の川を堀て石額を得たりき額

石額正面之圖

取立九三尺横二尺許

阿沼美宮得石額之碑

式内名神伊豫國阿沼美神社者室町氏以還海内戦爭屢經兵燹祀典淆乱失其名號不可得而知者數百年矣和氣郡大内郷有一社號曰新宮會社前橋壞里民聚修之穿地丈餘偶得石額刻曰阿沼美宮寶天保四年癸巳秋九月六日也於是始知為其社矣即聞于官越五年甲午春藩命奏之

同裏面之圖

石面諸〻て文字定可〻て延文の年号ゝ〻ト

天朝遂乃賜神宣告文及幣帛然後式内名神伊豫國阿沼美神社者依然復其舊哉於戲是豈方今天下和平國君仁明萬民豊樂之瑞祥也歟因勒之石以表于後昆係之以銘曰

雲霧時蔽　靈光未昧
一片石額　以徴後代

松山藩大高阪亀謹撰

面に阿沼美宮の四字を彫り囲く朝廷に訴へて新に勅有て此一社を阿沼美神社と定め給へり

按年久く埋もれ神の再世に出て幣玉一所ありめ紙ハ所々

或云神名帳に温泉郡と所々を和氣郡に掘出し石額甚疑し

されど郡郷ハ彼此入易る事も多く神々乱世打續きに分ば

心ある武士ものの尊き神なるも知る社ハ多く毀ちぬ出る

に移すもの所々ハ所々に定め

今ハ朝廷より定め給へるや

大成曰松山城下に味酒村三嶋社ハ式外の神にて越智郡の三嶋明神を移祀る此阿沼美神社ハ味酒の三島なるべきハ妄説なるに

或書に

春枝曰温泉郡江戸山に阿沼美墓と云所ありて此処必舊地なるべし

又按式内何宮とあるハ天皇を祭る宇佐宮なるの外ハ皆何神社なるべく宮とハ云べきと早く延文の頃に誤書と見て後世天満宮東照宮ハ特賜の号なるべし其外ハ皆某社と某宮とハ云べ式内の社のよりなるべし

○延命寺

和氣濱に在り真言宗本尊阿彌陀佛立像長三尺五寸四國順拜五拾三番の札所なり

○太山寺

太山寺村に在り竜雲山護持院と号く真言宗本尊十一面観音長六尺二分行基作四国順拝五拾二番札所也

俚諺集云豊後國内山長者と云人上京の事有りて高濱前まで難風に逢ひ海上安からず仍て堂宇を建立せんと願せば波風忽穏なる事に依て天平五年六月十八日此堂を造営すと云又一説に

此本尊久禾郡志津川村北方村に在りと云孝謙天皇天平勝寶元年八月十八日勅願所として再建七堂伽藍六十六坊の大浄刹と成玉へり其後世々の帝王一代に観音一體宛安置玉へり中頃回禄後後冷泉院康平五年再建有る時も先例に任せ十一面観音を造加し玉へり夫より後三條院延久元年堀川院寛治元年鳥羽院天仁元年崇徳院大治元年近衛院康治元年後白河院喜元二年土御門院寄瑞の事有て文明十七年再興有り其時願主河野刑部大輔通直三重寶塔を建立すと云

○蓮花寺

空岡山に在り藥王院と号く本尊藥師如来天平十五年六月十七日里人此山頂に佛像を見る何處より飛来いたる佛像なりと寺異の思ひなり山の半腹に下りて合掌礼拝すれ仍て其処を礼拝坂と云時に行基法師行脚して此に至り光明を尋て此像を拾ひ即堂宇を建立して佛像を安置すと今の藥師是なり夫より貴賤男女参詣すること影の如と俚諺集に見られ

按天平年中行基法師諸國ヲ行脚〳〵佛寺を造立す或ハ佛体を土中ヨ埋置て夢想ヨ託〳〵掘出〳〵又ハ山嶺ヨ捨置て室中ヨ飛来〳〵如くなり為〳〵愚民を欺くのみならず畏くも天聽ヨ達し〳〵聰明を晴〳〵聖智と或〳〵奉ラるる愚〳〵是等小児の戯ヨ似たれる上世の人質直ヨして彼ヲ誣事多と悟〳〵嘆〳〵ヨ餘りある事〳〵

前松山城主加藤喜明朝臣の免許状有り其文曰

室岡山ヨ方へ頌置申ハ写木茂り悪江を下刈せ也宜様

一の戸付者也

寛永三年五月廿七日　加藤左馬助喜明判

室岡法印

○西法寺

伊葉村ヨ在ル本尊薬師二體有一体ハ立像惠心作一体ハ座像ヨて寂澄作也と云延暦十一年河野家建立ヨて開基辨豪上人昔時ハ七堂伽藍二十二坊有一度焼失後今の地ヨ遷す舊ハ仁王門を十八町奥ヨ在ル今の寺ハ廿二坊の内十藏坊ヨリ云

○三津濱

松山城下ヨ一里餘西ヨ在り古三津ヨリ此所ヨ移ル云

舊蹟考ヨ三津の三八例の假字ヨて古大御船の泊〳〵ヨるとハ御津ハいりみなと〳〵ヨて南海治乱記ヨ河野通直豊前國根津浦ヨ出船

興居島
一名いよのみさゞ
伊豫小富士

高山
寄せき
國を
つゝみ
ねじの
手枕を
ちよと
摸して
松菴

〜て豫州御津濱ゟ渡りるゝと見ゝとゝば舊ハ御津と書るゝ〜

按日本書紀ゟ御船泊于熟田津石湯行宮又万葉集ゟ熟田津尓船乘世武登月待者潮乃満ぬる熟田津ハ此処なるべ〜そ、温泉ゟ行幸〜時御船泊玉ひ〜ゟ外ゟ望ぶるゝ里人云昔ハ湯の河原ゟ入海なりと今の如くなりぬと宮ゟ出るゝ今の如くなりぬ

〜れど御津と云名ハ御船泊玉ひ〜ゟ名なるべ〜れば古の熟田津也といふも証事ゟハ遠ど猶此ゟハ温泉の條ゟ〜る〜

○興居嶋

三津濱の海上ゟ在り其形容富士山ゟ似ゟ仍て俗ゟ伊豫小富士と云

宇都宮の黨数代此島ゟ拠ゟり又南海治乱記ニ興居嶋ゟ得居播磨守ゟ見ゟ

殘太平記云興居嶋城土宇都宮遠江守モ内ニ長曽我部元親ト内通シ此度ハ質ヲ送遣シ降參セシ程ニ元親得大利早ゝ土州ニ帰陣ス

又云宇都宮西園寺敵ニ組スト聞シカバ當国太守河野兵部少輔通直驚其勢五千余騎永禄十一年八月十五日追手搦手海陸操合セ興居島ニ押寄タリ宇都宮遠江守元綱兼テカクト軍慮怠ラズサレバ頼ヲ拠ル菅田隼人正猶之ハ大津城ニ籠居手勢僅二千余騎一場必死ト楯籠ル寄手ハ城ヲ圍テ日夜攻上ル城内究竟ノ射手鉄炮練磨是軽共放ツ玉箭人ニ乗サレハ馬ニ中リ寄手討死手負数ヲ知ズ云〜

又云守都宮ノ両黨相伴テ此與居嶌ニ住居メ二百余歳革ニ是河野氏ノ恩幸ナリ

按豫章記豫陽盛衰記等皆云和氣姫此島に居て三子を産み給ふ茅三子小千御子是也母の居給ふ嶌なれば母居嶋と云ふを後に與居嶌と改むと是後世附會妄説にて固取るに足らず我國上世詞にはしく文字なし文字後に假にあてゝ所謂假字也その假字に就て理義をといふは皆非なりコヽとは凝堅りて成出る意にて万葉三長歌に磐金之凝敷山乎超不勝而なくはる如く山の凝堅りて高く成出たる島をいへば此コヽ嶋もさる意にて付たる名なるを著しからぬ假字に與居と云字を書たるにて何の故無

勢の妄言を唱て後世を誤るもの多き此類尤多し

又按伊豫高嶺と云ハ赤人の詠給へるをはじめ後世の哥にもあまたあれど今ハいづれの山とも定かならず證なければ石鎚山の此國内に最高き山なればおしつけたるなるべし舊蹟考にもいへりさる事なれば専ら此説によるべきにもあらず彼赤人の哥に嶋山の宜しき國とあらはしき伊豫の高嶺の伊佐庭の岡にたゝしく見ても石鎚山ならでもあらずば此ハ人のかなく疑ふのすておのれかく思ひよれる事あり彼赤人の詠る高嶺ハ昔ハ此與居嶌までハいと近かりつるハさまで高き山ならずとも其形冨士の高嶺に甚く似たれば伊豫の高根とハ詠玉へるなるらん

さて伊左ぶ波のしづくにぬれてきこゆれ又此ぶよき
こゝきとよわをもて奥居嶌と名付るもいかんう後世ゑ伊
よのこゝぬ
豫小冨士と名つけるもいよれ高嶺と云意なるべしまれぐこ八定
てりつるハなるぶ為ひよれるまゝ試ゑるるを

○温泉郡　和名抄ゑ湯郡と訓り後世オンセンと唱ふハ訛なを

續日本書紀高野巻曰神護景雲三年夏四月壬寅伊豫國温泉郡人正八位上味酒部稲依等三人賜姓平郡味酒臣

三代實録曰貞觀三年九月廿六日左京人大内記從七位上味酒首文雄山城少目從八位下味酒首文主文章生無位味酒首文宗等三人并賜巨勢朝臣

大成云味酒郷ゑも出ル姓なるべし

○和名抄郷名

桑原郷　埴生郷　立花郷　井上郷

味酒郷

昔ハ此五郷なりしと今ハ四拾九村ヨ分ヒしと

味酒村 八百六十四石余　衣山村 三百七十四石余　山西村 八百五十八石余　別府村 六百四十一石余

齋院村 千二百五十五石余　高岡村 千二百十六石余　北高田村 四百二十四石余　南高田村 八百廿五石余

久保田村 三百四十三石余　冨久村 四百十九石余　針田村 六百五十六石余　土居田村 千百十六石余

南江戸村 千九百十五石余　北江戸村 千百十四石余　竹原村 九百九十九石余　小栗村 四百十七石余

藤原村 四百九十五石余　立花村 六百八十八石余　中村 四百十四石余　小坂村 四百十三石余

枝松村 四百六十四石余　樽味村 三百六十二石余　桑原村 六百五十六石余　新百姓村 百卅一石余

松末村 百八十九石余　三町村 百六十石余　畑寺村 四百卅石余　正圓寺村 三百四十五石余

東野村 二百九十六石余　溝辺村 三百四石余　石手村 五百五十石余　道後村 千二百五十五石余

持田村 八百十二石余　市方村 三百五十二石余　湯山村 千三百六十六石余　澤村 湯山高之内下同

柳村　末村　食場村　高野村

杉田村　別名村　川江村　福見川村

宿原村

總高二萬千八百拾五石九斗五升四合

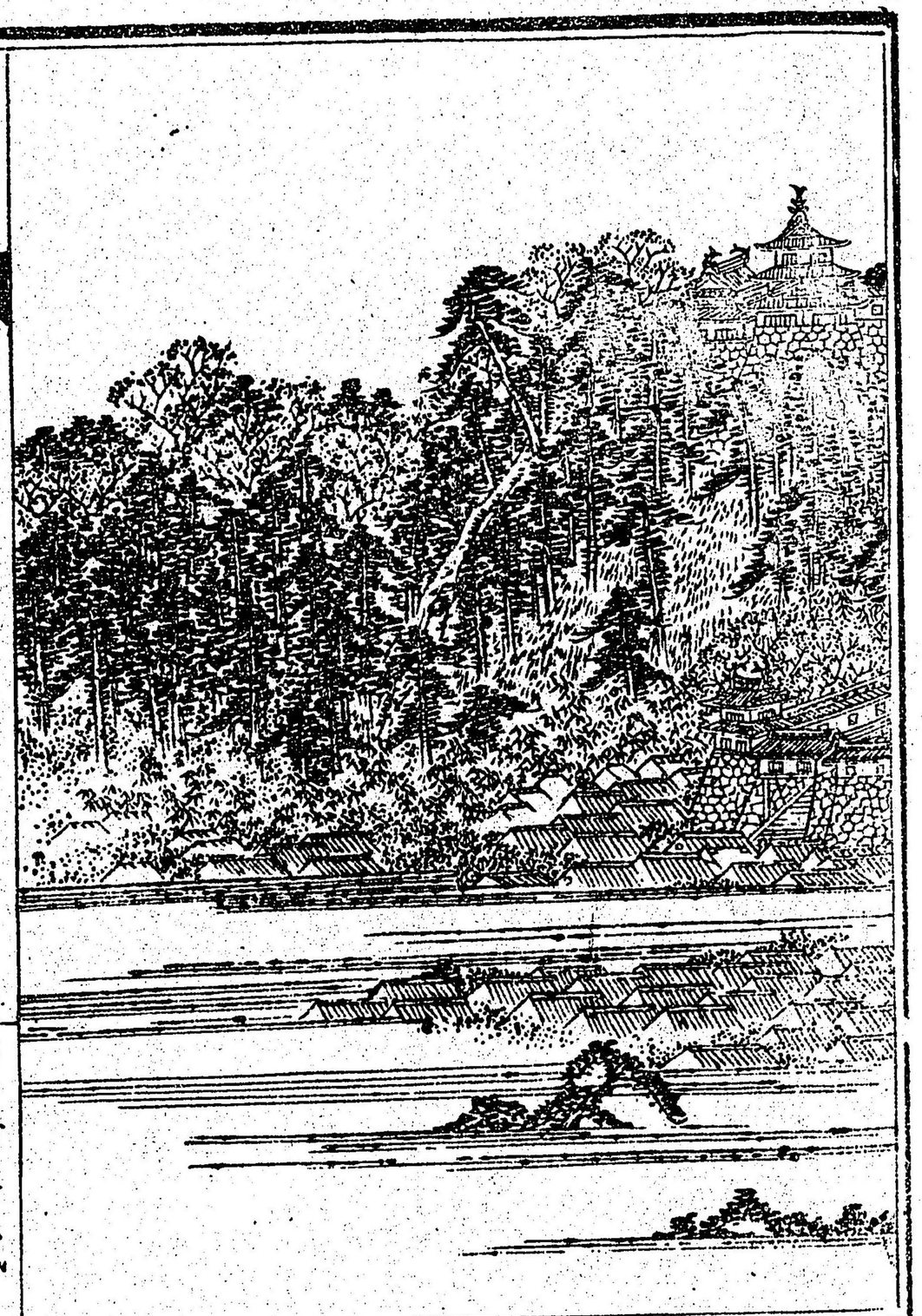
○味酒明神

味酒村ヨ在テ三嶋明神ト祭る味酒ハウヘザケの約言なりとヒサケと唱るハ訛なり此神社舊ハ勝山ヨ在リテ慶長七年壬戌歳加藤庚松前城ヨ勝山ヨ移シ松山ヨ改ムルヨ時今の所ヨ遷るなり

按此味酒明神を阿沼美神也とするハ妄説なるべし舊蹟考に完戸大成が按已に阿沼美神社の條にいへるごとし

○松山城

此山平田曠野の中間に特立して海岸を隔る事二里許南方に石手川の流あり東北ハ山遠くして巔に五重の天守を築き二丸三丸東北に大手に大城戸を構へ北の山腰に高石垣を築立櫓を構て矢狭間鉄炮狭間其数を知ず要害堅固にして遠望の風景殊にめでたし慶長八年加藤左馬助嘉明朝臣松前城を移給へるに伝る舊ハ勝山といひ後に松山と更めて云普請全調ざるに加藤侯ハ四拾万石を賜り奥州會津に移玉へり寛永四年蒲生秀行の次男中務大輔忠知朝臣出羽上山四万石より二拾万石を加増して此城に移玉へり夫より八年にして同十一年甲戌歳八月十八日知朝臣京都にて卒り給へり嗣子邑除と除邑録に見へ同十二年乙亥歳東照神君異父同母の御弟久松従四位少将定勝朝臣の世子松平隠岐守定行朝臣拾五萬石にて當城を賜り伊勢桑名城より遷り給へり同十九年此城を修営して五重天守を改て三重と為玉へり夫より数代連綿して相續して玉へり其後雷火して天守焼失して近世再建して五重城下の町数七十一町家数千七百三十六軒と俚諺集に誌し侯ものも近世人家ますます繁栄して此國第一の都會となるぬ



松山城（まつやまじょう）

三尤堀の戌亥の隅ゟ制札場ゟ札辻と云諸方道法此所ゟ定ル
東武へ海陸二百拾八里二町三拾九間也内城ゟ三津迄一里十七町
三十間大坂迄船路八拾三里近國への道法如尤

土佐高知　陸地廿五里半三十八間　船路百八十里半六町
阿波徳島　同　四十五里三町卅七間　同　七十四里半十二町
讃岐高松　同　三十七里半十町五間　同　四十四里半拾二町
同　丸亀　同　三十一里半十町　同　三十七里半十二町

○松山縞

伊豫國ゟ木綿を織出す中ゟ木綿縞松山を上品と寸世ゟ松山縞と稱す其精巧多事他國の及所ゟ少ず

按伊豫國古昔八綾四維等の絹を織て貢獻せと今八絶て此事無
續日本書紀元明卷云和銅五年七月令伊勢尾張參河駿川信濃
近江越前丹波但馬因幡伯耆出雲播磨備前備中備後安藝
紀伊阿波伊豫讃岐等二十一國始織綾錦
延喜式主計云伊豫土佐右二十九國輸絹調兩面五疋九點四維
二疋窠綾二窠綾各六疋小鸚鵡綾二疋七窠綾八疋薔薇疋緋
四疋緋帛四十五疋縹帛十疋皂帛五疋白絹十疋

○温泉

そ後山の麓ゟ在り往ゟ熟田津石湯といひ多と云つの傳ゟ道後の
温泉と云此を境ゟ多ゟ八千家物語源平盛衰記等ゟ道中道後の

境内高縄山とゝなゝて山西ゝ麓ゝ三ゝ丁ゝ程ゝ下ゝ城下の名ゝ有ゝ今ハ温泉の名ゝ有ゝ此温泉ハ神代ゝ始り代ゝの帝王行幸ゝ多ゝ功験他の温泉ゝ比ゝれば浴する人ゝ里ゝ遠ゝ迄ゝ世ゝ此ゝ所ゝ苦ハ幾所ゝも湧出ゝ

六花集ゝ

伊豫の湯氏湯桁の松ハ龍や川ゝ岸ハ高ゝ中ハ十六

新葉集ゝ

神ゝ代ゝ思ひ出ゝ湯の名ゝ

源氏物語宮城の名ゝ

ゝ伊豫の湯桁と名ゝ

玄道云催馬楽歌ゝ以ゝ乃由乃由乃多波伊久川伊尤之良須也

ゝとゝ

按今も諏訪の温泉ゝハ驛中ゝ湧出ゝ旅人の宿ゝハ別ゝ

湯ゝ

ゝれゝハ一棟ゝ上中下の三等ゝ分ゝ又養生湯ゝ

の流ゝ

釋日本紀曰伊豫風土記云湯郡大宍持命見恥而宿祭毘古那命欲活而大分速見湯自下樋持度来以宿祭毘古那命而浴漬者暫

間有沽而起居然詠曰真暫寢哉踐健跡處今在湯中石上也九湯之貴
奇不神世時耳於今世染疹病万生為除病存身要藥也天皇等於
湯幸行降坐五度也以大帶日子天皇景行天皇與大后八坂入姫命二軀為
一度也以帶中日子天皇仲哀天皇與大后息長帶姫命神功皇后二軀為一度也
以上宮聖徳皇子為一度及侍高麗恵総僧葛城臣等也于時立湯
岡側碑文記曰云云以岡本天皇舒明天皇并皇后二軀為一度也于時於大
殿戸有槌木云臣木於其上集鵠云此米鳥天皇為此鳥敷系穂等羹
賜也以後岡本天皇齊明天皇近江大津宮御宇天皇天智天皇浄御原御宇
天皇天武天皇三軀為一度此謂幸行五度也
俚諺集云景行天皇の行在所ハ今の明王院北の岡山也仲哀天皇の
行在所ハ今の八幡宮の林麓也聖徳太子行啓の所ハ八幡宮の西乃
禁下也舒明天皇の行在所ハ湯より八町西北の山禁下也齊明天皇天
智天皇天武天皇三帝の行在所ハ橘村也
古事記下巻曰故其輕太子者流於伊余湯也
按湯字疑ハ衍そんの輕太子と流ハ字麻郡よりの誤
今も殘猶ハ考ふるに一巻に載

日本書紀舒明巻曰十一年十二月幸于伊豫温湯宮
同十二年四月天皇至自伊豫便居厩坂宮
扶桑略記巻曰舒明天皇十一年十二月幸於伊豫温泉宮時大風雨
同村上帝天暦七年三月廿日己亥擢少僧都明珍申給官符向伊

豫國温泉治病

日本書紀齊明卷曰七年正月庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮　熟田津此云伊枳陀豆

万葉集三卷山部宿禰赤人至伊豫温泉作歌一首并短歌

皇祖神之神乃御言乃敷座國之盡湯者霜左波爾雖在嶋山之宜國跡極此疑伊豫能高嶺乃射狹庭乃岡爾立之而歌思辭思為師三湯之上乃樹村寸見者臣木毛生繼爾家里鳴鳥之音毛不更遐代爾神左備将往行幸處

反歌

百式紀乃大宮人乃飽田津爾船乗将為年之不知久

大成云伊豫の高嶺の射狹庭乃岡とよめるいと心潤しうの高根といひ庭の岡とハ程遠く陽ともの温泉郡の玉井某和田某ゑぐ山ともいはゞ〻く思ひ〻と熟思よくもあらぬおもひなる歌

とよめるまて嶋山のゆゑ国とて伊豫の高嶺と遠よそ歌

又近き彼岡をゝ　ゆゑ意をんゝ古ゆゑ嶋ゝやまるさ海

くゝあるゆゑもとれなるもの　ゆゑ世もとのもひなるべし

日本書紀天武卷曰十三年冬十月大地震時伊豫温泉没而不出

俚諺集云慶長十九年十月廿五日大地震湯没して出ず其後湯神社前より神楽を奏し祈て湯湧出る事舊の如し貞享二年十二月ト日大地震泥湯湧出後より清湯と成宝永四年十月

四日讃州大地震温泉没して不出仍て湯神社に於て神楽を奏し社造補なると玉垣かゝ渡し朱鳥居建立道後町中より千本の神木を御山の麓下に植玉石に仮殿を営み奉幣祈念怠事なし翌年正月廿九日九百四十五日を経て涌出四月朔日より舊の如く浴すべきを得是より霊泉いよ〳〵新に妙験古に倍り又安政元年十一月五日申中刻過大地震温泉没〳〵不出例に依て湯神社に神楽を奏して祈念す翌年正月末より涌始て二月末に至ては再舊の如し

慶長十九年より安政元年迄　二百四十一年

寛文二年より　同　百九十三年

貞享二年より　同　百七十年

寶永四年より　同　百四十八年

○温泉碑

是厩戸皇子温泉に行啟の時建給ひしゝ乃也されどいつの頃よりか埋てなくなる寺碑文のこゝハ釋日本紀に見えたる其文曰

法興六年十月歳在丙辰我法王大王與惠総法師及葛城臣道遥庚與村正觀神井歎世妙驗欲叙意聊作碑文一首惟夫日月照於上而不私神井出於下無不給万機所以妙應百姓所以潛扇若乃照給無偏私何異于壽國隨華臺而開合沐神井而瘳疹詎殊于浴花池而化溺窺望山岳之巖崿反冀子平之能往

椿樹相蔭而穹窿實相五百之張蓋臨朝啼鳥而戲吐下何曉亂音之聒耳丹花卷葉映照玉菓珍葩以垂井經過其下可優遊豈悟洪灌霄庭意與才拙實慚七步後定君子幸無蚩咲也

按法興舊本作弘興ナレドモ大和國法隆寺釋迦仏光背銘ヨ法興元卅一年歳次辛巳十二月云ヘト有リ法興六年丙辰ヨリ推ヨ今年辛巳卅一年ヨ當ヒバ必法興ナルベキ逸文風土記の信友ノ按ヨ從テ改メリ機舊本誤在應上舛作升浴作落窿作窿華作草今皆從或書改之然ヒドモ語意猶解ガ紀所ノ如ク猶後人の考をまち

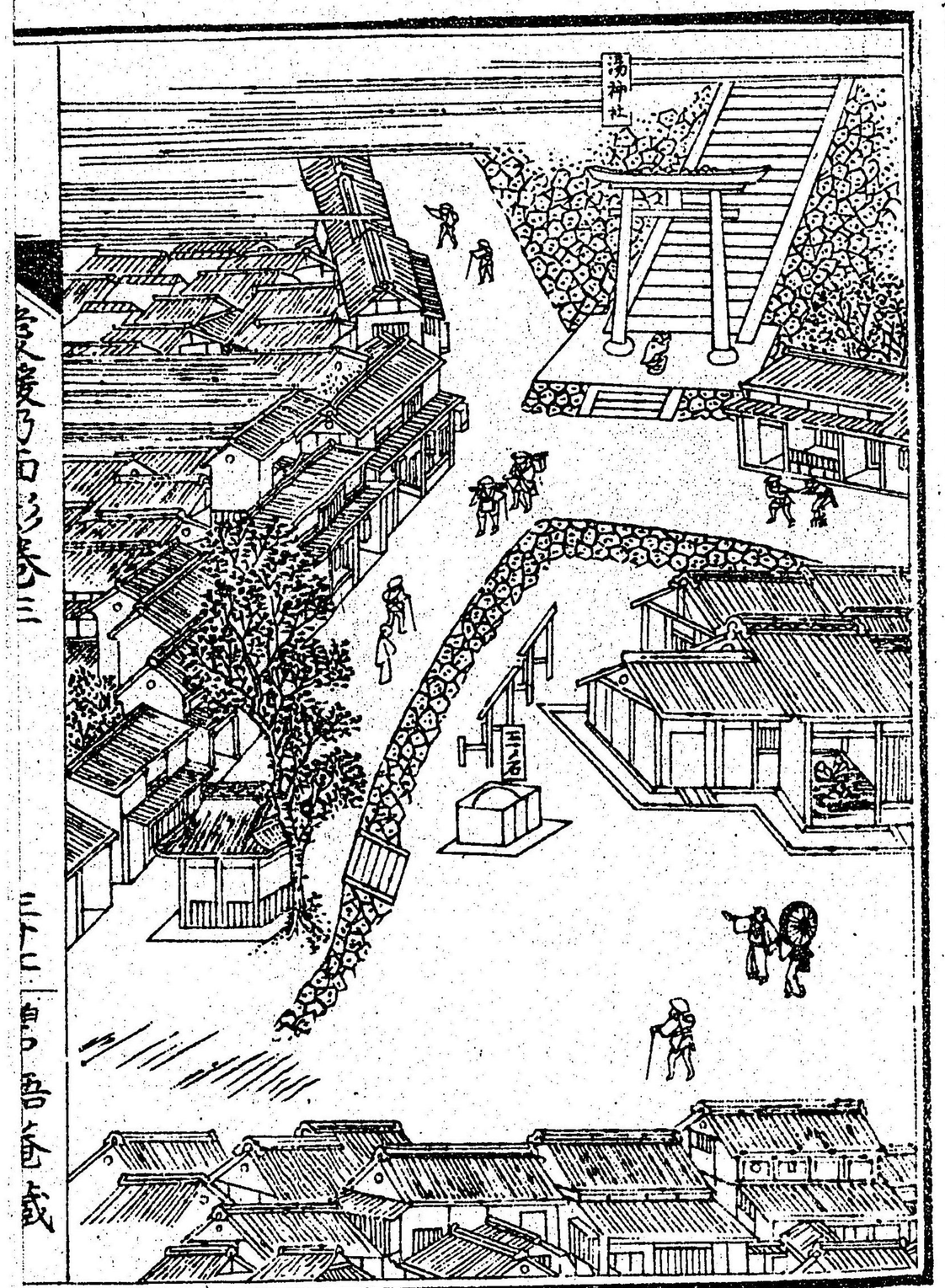
橘春暉ガ北窓瑣談曰寛政甲寅春伊豫國道後温泉ノ側ニ畑アリテ昔ヨリ土民ノ云傳テ不淨ヲ忌ムモノニ此畑ヲ汚ス時ハ祟リヲ得テ寒熱ヲ發ス今年松山某考ヘテ此中ニ必聖德太子ノ碑アルベシトテ人シテ掘シニ果メ大ナ碑石ヲ掘出シタリサバコソトテ未タ全ク出終ラザル前ヨリ水ヲ洗ヒナドシテ見タリシニ聖德太子其昔温泉ヘメサレシ時ノ御文章見タリシニソノ時隨從人ノ姓名ヲ載タリ稀代ノ珍物也トテ喜ビ掘タリシニ温泉ノアタリ近キ土地ヲホリ穴ニセシ故ニ温泉中ヘ濁リユキタリシカバ所ノ人大ニ驚キ若シ温泉ニ別条アル時ハ此里ノ人民數百人飢渴ニ及ブベシ此碑掘ルヿ無用ナリトテ皆ミ戒メ止メタリシカバ又フタヽビ埋メタリイト殘多キヿトリキト此アタリノ人語リキ

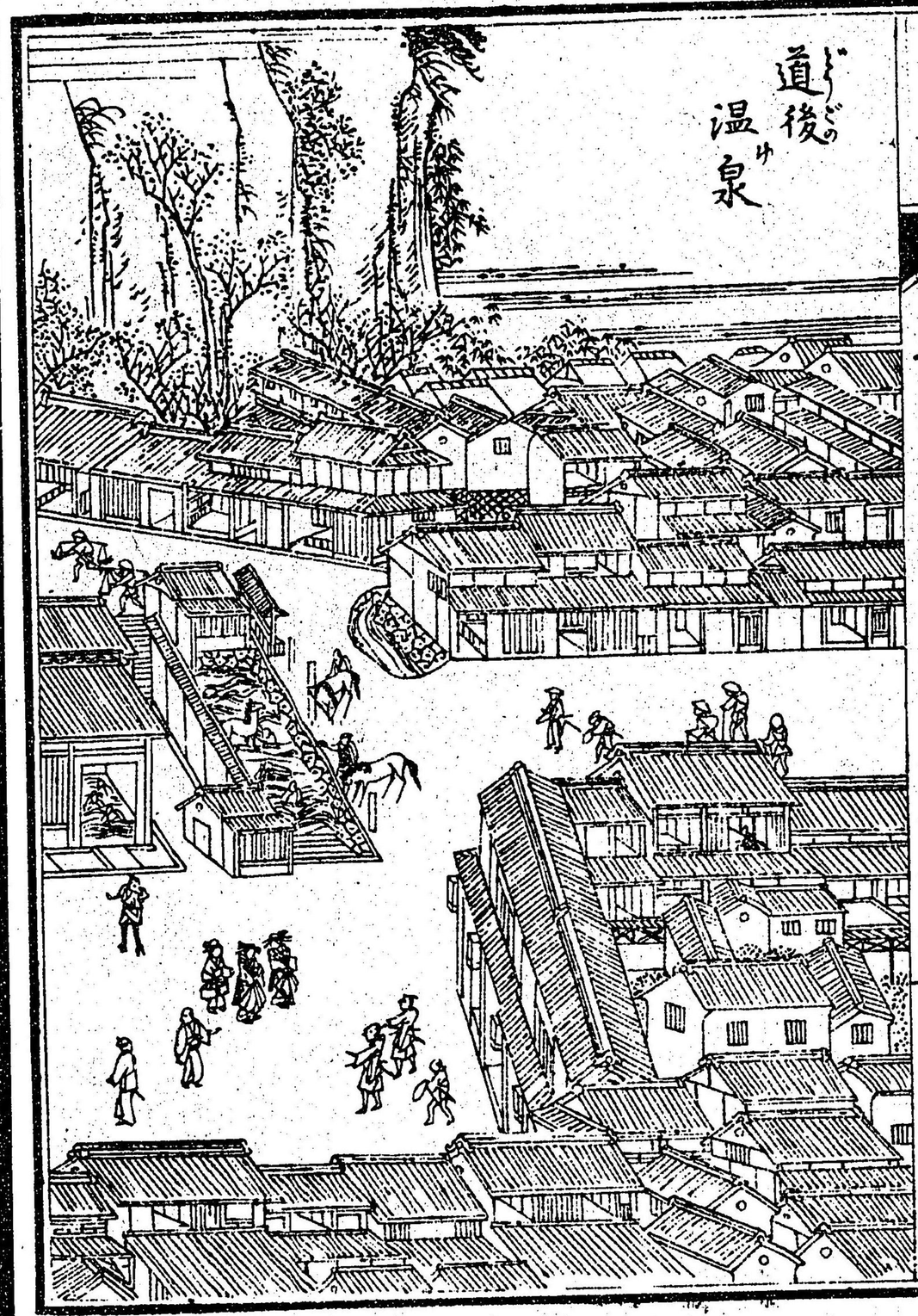
舊蹟考曰或書云嗟乎聖德太子所撰之碑文尚埋沒而不知所在曾聞鄉民披山間莽茸斲金地數尺得一古碑憚人怪異之私還塡之云此温泉近境則果為夫古碑不可誣也可痛惜焉温泉之東南有古城址其東北之岡通俗呼伊社尓波有一院堂安藥師宝龕直地架地翕不便于闔闢釘着深秘鎮之口碑傳之此像毒石也從地涌出礶子不拔若直視之則毒氣射眼乍瞽云所以幾百年歷住之僧侶不容瞻禮也議者云是必夫古碑或碑上鐫藥師之像而不称碑以像稱乎若果然則只恁麼地蘊覆去也可太惜也

按古碑の埋沒ハ誠ニ惜ムベシ義安寺の藥師果シテ碑

ニハ秘シ置キ物ニハ遠ヨリ拝キテ疑ヲ晴ラスベシ廉ヲ弁キテ疑ヲ晴ラス例ハ法師の詭言ニ必ス理の負キ事ハ眼青ニ碑石ニ見ル眼の青ニ見ル殊ニ此金龍も古き物ニハ違ヒナシ贋ト云ハンモ遠ク近ク新ニ造出ンヨリ所ヲ造出ヲ以テ古ト言ヒ事明ラカニ

服部元喬ノ温泉碑文中ニ云自寛永中松山侯食封伊豫國温泉在疆距松山治城東北二十里於是累世尊崇其湯及神祠及今侯源定喬刻石紀其事志傳永久乃典故所列足以徵文獻矣と其温泉の功德を賞せる甚詳なり


湯神社


道後の温泉

て世々を太子の撰ましまし感らく此碑もゆゑいまだ建ず
全文南郭文集三編に載せたり

○熟田津

日本書紀齊明巻曰七年正月庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮熟田津此云伊枳陀豆

万葉集一巻額田王歌熟田津爾船乗世武登月待者潮毛可叙比沼今者許奴乞菜

右撿山上憶良大夫類聚歌林曰飛鳥岡本宮御宇天皇己丑九年十月十二月己巳朔壬子天皇大后幸于伊豫湯宮後岡本宮馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅御船西征始就海路庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮

同三巻山部宿祢赤人至伊豫温泉作歌百首紀乃大宮人之飽田津爾船乗将為年之不知久

同十一巻悲別歌柔田津爾舟乗将為跡聞之苗如何毛君之所見不来将有

舊考曰土俗の傳説に昔温泉の地名を湯といひ今は地脉変じて二里ばかり西に隔てぬる田津なる田津に或書に大成按に古は熟田津といひしのみなれば古書に

て故世をして太子の撰ましまし感らく此碑を伊予に建ず
全文南郭文集三編に載せたり

○熟田津

日本書紀齊明巻曰七年正月庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮
行宮 熟田津此云伊枳陀豆
万葉集一巻額田王歌熟田津爾船乗世武登月待者潮毛
可叙比沼今者許熟乞茶
右撿山上憶良大夫類聚歌林曰飛鳥岡本宮御宇天皇己丑九
年丁酉十二月己巳朔壬子天皇大后幸于伊豫湯宮後岡本宮
馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅御船西征始就海

路庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮
同、三巻山部宿祢赤人至伊豫温泉作歌百首紀乃大宮人之飽
田津爾船乗将為年之不知久
同十一巻悲別歌柔田津爾舟乗将為跡聞之苗如何毛君之
所見不来将有
舊蹟考曰土俗の傳説に昔、温泉の地名を湯といひき
田津とも又すぐ田津とも云湯の辺に海を称きるなり
今は地脉変じて二里ばかり西に隔りぬる田津なる田津に
ぎ田津と会せて二津となる或書に大成按に
古は熟田津とのみいひしなるべし古書に

もまあの書よりいかゞ又行しるとうの反歌よ飽田津と所
所ハ千蔭が万葉略解よ飽ハ饒の誤なゞ又久老云或人共地
此様よ云るよ也ハ饒田津とも飽田津とも今稽考
とそ稽考ハ尤也飽ハ饒ト字形似ば寫誤り歟
ものなる或人の説ハ非也飽田津と云地名なるあゞ又なる
四津ゝも固りなるそうの熟田津の熟を熟とも書
誤なると見ゝ字を訂ばゝ十りゝハ訓誤りる者なゞ
三津濱人のうゝうゝ山傑まで昔ハ海なて此辺ハ築地なと
実なるなるゞ三津の三ハ例の假字なて古天皇等
の行幸の時御船の泊ゝ所なれば御津とけを築地と成

もなる海際なれば今も御津ハ山なゞ又熟田津石湯と所
名ハ古書よ磯ト通ゝ今ハ昔を温泉うの素田津ち紀
邉よ在ゝ又ハ今の山間の迫門なゞ潮の満来ゝ入江なる
ゝ古古書なゞの今世の地理よ比べゝ考ら國ゝ考れれ
なるば稽考ら尤

○出雲岡神社

延喜式ハ温泉郡出雲岡神社と所舊蹟考曰或書云
祭神稲田姫命也是素尊妃大己貴命母也俗號出雲御前
今西宮内有小社是也又一説三穂津姫大己貴命妃也云
御社ハ温湯の側冠山と云所よ立せる湯神社の傍なる小祠

よみあるを要する是なり

○湯神社

延喜式に温泉郡湯神社と記せる所ハ大己貴命少彦名命なり此社舊ハ温泉の東二町ばかり山際に立しと何世より出雲岡神の為せる冠山に遷奉りしを舊地に小祠有て土人二神とし二神とハ二柱の神と祭りなるべし

○伊佐尓波神社

延喜式に温泉郡伊佐尓波神社と記せる所ハ詳ならず御社ハ舊ハ伊佐尓波崗に為せりしと今ハ湯月八幡宮の傍なる小祠に祭奉る是なり

舊蹟考云祭神ハ健内宿禰大臣なるべし　社傳なるべし或書云仲哀功后行幸ありし時宮を造り一所を今御カリヤ山と云其後二帝應神帝を併祀るハ八幡宮と号し見る其外行幸の時の行宮ハ此白此林なる由云傳なりと云

俚諺集曰或云石手寺住僧實秀法印と云人有り其弟子辨海後に參河国に行しと或人東武に往来の節彼辨海の行方を尋しに八十餘の老僧なる談話の序に道後に行ハの岡と云所ありと知るべしと云ふ故に其所に詣と授く

一社人等も知るべし便りに云ふ伊佐尓波岡とハ今八幡宮の後称木谷より古城の邊まで昔ハ山つゞき世とすべく

伊佐尓波岡と云て河野殿城を築し時山を穿き堀を切る故
今別の様なれどその時まづは八幡宮もうの山に在りて築城の時
まず鐘楼の邊へ遷座し奉りて小祠を建て奉幣信仰す
後今古城竹林の中南の山端に在て俗岩寺權現と云伊佐尓
波の出崎に在り中古庭崎と云ふ岩崎と云ふ所を訛て岩崎と云
是八垂跡の沿革舊跡を存する迄建る所社八即湯
月八幡宮なり伊佐尓波神社也湯月と云も細川初湯築
と書も俗に訛る仲哀天皇皇后と伴に幸し給
時新に御殿を造て行宮も行在所も云湯壺を構へ湯
を汲運し故湯築と云ひ湯月と書誤る行宮

の跡に社を建て伊佐尓波神社と崇奉る即仲哀天皇皇后
應神天皇三所なる山を御行山と云ふ又畧して御行宮山と語り
傳き實秀法印八其頃八幡宮の別當なり故社傳委く
覚て辨海法印も語傳られしなり
按此説に拠て考訂し古の事も推
量ねばなるべし
又の伊佐尓波と云名八万葉仙覺抄に引處の風土記云
時立湯崗側碑文處謂伊佐爾波者當土諸人等其碑文
欲見而伊社那比來因謂伊社爾波也と云ふ知るべし

○湯月八幡宮

山城国石清水の宮殿を摸奉て其壮厳の麗き事筆の及所より寸抑此御社の原始詳まゝ或云越智玉興十三代温泉郡司元興建立也と或云即伊佐尓波神社是也と

俚諺集云延久五年国司源頼義朝臣の命に依て河野親経八箇所八幡宮を建立寸當社も其一にして此時再建すと云

按再建とゝば此時親経の建立せるハ所ざふ歟

又云明應の頃河野家より再造有て刑部太輔通宣より賜る処の書面四通社長玉井某の家に傳ふと云河野家代々崇尊して和氣郡の内五拾石の神領を寄附せり河野断絶の後暫社領に成て社破壊して記録等紛失寸慶長八年加藤侯改城の後當社を鎮守と寸是より前喜明朝鮮征伐の時霊夢の告有て明日一戦に勝利を得高の大艦数艘を打取武名を異域に揚ると於是喜明帰朝後社壇を建立し神領百石を久米郡居合村に寄附せり

又寛文七年丁未春松山城主少将定長公神夢の告に依新に再建有り此時山城国石清水の壮觀を室殿回廊彫物に至まで寸分不違摸せり玉ふ処に今の宮殿是なり其時旗鎧弓矢太刀神馬等を神獻し神領二百石を寄附し給へり

○湯月古城

俚諺集云河野九郎左衛門盛任対馬守後入道して善恵と号

寸此後代々住之堀二重ヨ構へ東西ヨ門有り城ハ東面也東ヨ當て
切抜門と云有、往古石手寺のつゝて夫より東ハ石手寺境内也と云
土居外廻り五百廿間東城戸より西城戸まで六百六十間但し中道通り
同内廻り四百六拾間本壇高四拾五間三尺東四拾九間南北十一間三尺
中壇東西五間南北三間杉壇高七間東西十二間南北四拾五間三尺也今ハ
大竹茂り二本の杉木残りて撞揚のみ城趾也
城中ヨ岩崎權現社あり此社舊河野氏の鎮守なりと元禄十
五年竹奉行安田又之丞義行と云人古城の南より拾得る神幣を
主々再建せりと云此社の〻伊佐尓波神社の所ヨ奉〻く誌〻
り

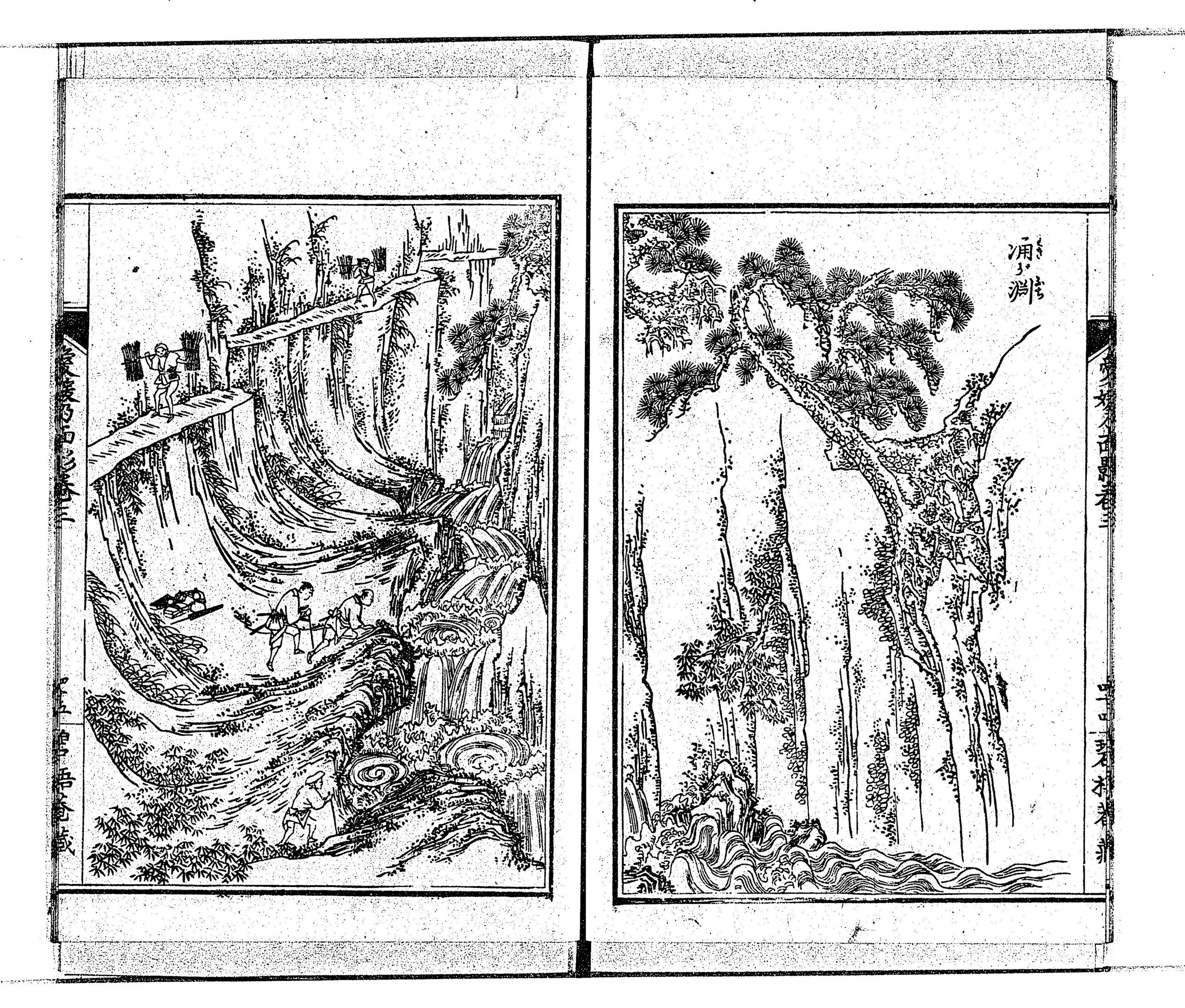
豫章記、跋曰河野殿没落事者天正十五年也従太閤被仰付冨田
民部殿拾万石大津居城御代官所拾万石也福島左衛門大夫
正則殿拾一万石湯月城居住御代官所九万石也後移國分城
以上十一年歟

○義安寺

温泉の東南ヨ在り禅宗本尊薬師如来行基作河野景通子彦
四郎義安と云人の建立せ〻寺なれバ義安寺と名〻と云或曰此寺の
本尊石佛ヨて即聖德太子の碑を祭り〻
俚諺集曰昔此寺を建んとて山より杣木数多出し〻る時此山ヨ續る
湯山より流ヨし〻材木を下し〻多ヨ涌が淵と云江ヨて水ヨ逆巻き

残らず西洋に流れ出ぬ土佐國は不思議の材木多く流れ出ぬ上
るとも義安寺と云ふ寺に伝へ来りの守護土佐に於ても材木
を以て一宇を建立し義安寺と名く共寺今猶存すと云
按ずるに怪説なれども園信に於て西洋説に地中に
のづから溝渠有て水道を通ずるの恰も人身に経絡有
の如しとなれば此も亦山脈に有て流
出るなり
又云天正十三年河野家断絶の時一族譜代の老臣ども二君
に事つかまつる世義安寺に於て神水を飲て誓約せしと云
傳へたるとぞ

○鷺谷寺
道後十六谷の内鷺谷と云ふに在て今は大禅寺と云本尊觀音
作者分明ならず大宮彫と云銘有と云支那千畏禅師開基なり
山上に唐佛の觀音を安置せり林下に井有て鷺井と名く
名泉なり相傳古温泉なり涌出る時鷺の足片輪なるが常に
来て足を漬しなつく程なる平愈なりと仍て此名を鷺谷と
又在の山麓に小社有て二神社と云湯神社の舊蹟なり
○寶巖寺
道後十六谷の内奥谷に在て時宗一遍上人の開基なる本尊
上人自作の自像也と云


涌沙淵

二名集云一遍上人ハ別所七郎通廣次男勝壽丸越智通秀發心して號智真坊是時宗の祖也建治元年始遊行天下藤澤寺の開山よして正應二年遷化也

俚諺集云此寺の開基一遍上人河野通信の孫通廣子也発心の始親族ゟ遺恨を挾む者有て殺害せんとしるゟ疵を蒙るゟ敵の太刀を奪取て命を助りと云其後建治年中熊野ゟ參詣し神託を蒙て諸國ゟ遊行するゟと始りと云

○三光田

其後温泉の西五六町樋股と云所ゟ川ゟ掘り出ること南ゟ在り五月の頃田ゟ植を渡へ明日苗を植んと思ふゟ泥ゟ中殊ゟ澄る石有り熟視れば日月星の光を顯せるを不思議るゟ思ひ耕作を止りと云と俚諺集ゟ見ゟ

按泥水中泉の涌出ゟ所なれば必速ゟ清澄すゟ如く涌出處ゟ日光映ずれば五彩の色を成ゟ事都水等の類るゟ歟

○石手寺

石手村ゟ在り熊野山虚藏院と号す本尊藥師座像二尺五寸行基作四國順拜五拾一番札所ゟ

俚諺集云神亀五年戊戌歳越智玉澄建立する所也舊ハ大伽藍すて安養寺と名く其頃ハ法相宗ゟと天長八年浮穴郡荏

原郷より右衛門三郎と云人りり利欲を貪り神仏を信ぜずして八人の男子儲け頓死す八塚そ今猶存せり夫より家を捨て四國を順礼しるより阿波國焼山寺の禁下して病死す一念願望を大師より誓しより河野與利の子與方生る時左手より一寸八分の石を握りて生れき石より文字有り曰右衛門三郎是然り権現の申子なりて寛平三年當寺を再建し熊野十二社権現を勧請し彼石を宝殿より藏く熊野山石手寺と稱す真言宗より改めて云寺中什物書面類多し尊氏將軍の御教書あり其文曰

安養寺當知行地不可有相違之由國宣如件

元弘三年九月三日　左衛門佐言上

昔八末寺六十六坊有りと今八保章院定觀院壇林坊新坊地藏坊等残るそ

○繁多寺

畑寺村より出る本尊薬師如来長三尺仏基作四國五拾番札所也國司源頼義朝臣の命より依て河野親經四拾八箇所の薬師堂を建立せりの一なりと云

俚諺集云後宇多院弘安二年閏月勅命より依て蒙古退治の祈り丹誠を凝しれば永仁二年鎌倉將軍下知状両六波羅下文等を賜り仍て當國守護代崇敬餘寺より起出す有識の高僧相續て住持八第七世快翁宗師洛陽泉涌寺二十六世の主盟にて

後小松院綸旨を帯し應永元年當國より下向し入院開堂の昔
八七堂伽藍三十六坊在しと時移り物変りて殿堂悉く顛倒て
其旧蹟荒野となり畏落壁敗て壇上の秋月をやどすのみ

○窪田天神社

窪田村に在り菅贈太政臣を祀る延喜の昔菅公太宰帥に流紫に下
せらるし時越智郡櫻井濱に船を寄せ夫より陸路此に来り暫く
滞留ありし旧蹟なりと云其時尤沓を脱捨玉ひしに依て此
所を沓脱と名く爰に紫へ趣おもむくとて名残を今出と宣
しなり今出濱と名くと俚諺集に見えたり別當長松山安楽寺と云
河野通元の寄附状なりと其文曰

窪田安楽寺領并天神宮領之事

右當寺者神と云佛と云威名甚以厳重也幸任先祖代々下知之
旨無相違令寺務直可抽國家安泰之祈禱精誠者也仍
状如件

永正元年甲子八月廿九日　伊豫守通元

○○院住持慶正禅師
（二字磨滅）

此の数代の下知状多く紛失せり菅公所持の鵜硯四五年紛失せり
貞享二年乙丑初夏の頃別當不思議の霊夢有て土中より掘出
しに形鵜鳥の如し宝永七年二月十八日社壇奏上し代々の
宝物等悉く焼失せりと云

○大空城墟

齋院村岩子山ニ在リ大祝與三郎と云者細川頼之ニ屬シ此城ニ籠リ此時南朝の御方ニ河野通朝世田城ニて自殺シ其子德君九世田城ニ落ル恵良城ニ入元服シ通充と名ル正平二十年正月十八日温泉山ニ陣を取合戦の事

豫章記ニ正月廿七日湯月山ヲ囲ミ攻ル程ニ細川天竺禅門以下大略自殺セラル其侭大空ヲ攻ラル城衆ハ大祝庄林國中ノ地頭御家人等ナリカヽル所ニ細川頼之大勢ヲ率テ道後ヘ打越ル通充大空ノ攻口ヲ放メ高縄城ヘ楯籠ラルヽと見ヘタ

南海治乱記ニ頼之ハ阿波ノ兵一万人ヲ以テ道後大空ト云処ニ云テ陣ヲ居河野ガ與力ノ通路ヲ絶テ謀ヲ回ラスと云こゝろとなり

○山崎八幡宮

江戸山ニ在リ延文六年の造営ニして願主修理亮平範有と云其後永應十九年久万式部丞通成再建すと俚諺集ニ見ヘタ

○彌勒寺

此寺古ハ定額寺にて一国ニ幾寺と定らるゝほどの大寺なれど今世絶て所在を尋ぬ

春枝云食場村山中横谷と云所ニ弥勒寺山と名付る處有大門又ハ弥勒堂毘沙門堂薬師堂なと云所もなく即定額寺の跡なりつの須ろ焼失て今ハ其名のみ残るとて彼薬師

堂八今石手寺中ゟ遷シ加藤喜明朝臣城を松山ゟ築き給ひ
一時城山の東ゟ此毘沙門ゟ遷祭ひる今横谷山毘沙門堂
とゝ

類聚國史百八十佛道部曰天長五年冬十月伊豫國彌勒寺預定額寺
同七年九月庚辰以伊豫國温泉郡定額寺為天台別院
續日本後紀九卷曰天長七年九月庚辰以伊豫國温泉郡定
額寺為天台別院
按定額ハ續日本紀ゟ定武散位定額員二百人又續日本后紀
ゟ囚獄司物部定額四十人ゟ定數と同意也
類聚國史百八十卷云天武天皇九年四月勅凡諸寺者自今
以後除為國大寺二三以外官府莫治と云ふ官府ゟ治る処の
大寺と二箇寺若ハ三箇寺と定て是を定額寺と云ふ
伊豫國の定額寺ハ國分寺と此弥勒寺のみて其外の寺
いまだ國史ゟ載らと見ずれば諸寺の縁起ゟ勅願
所なるも多くハ私言なる歟
○長福寺
別府村ゟ在り本尊藥師毘沙門地藏三體とも行基作なりと云
又聖德太子彫刻の不動明王空海筆不動画像唐土ゟ傳来の
両界曼陀羅等ハ皆貞享の春始く開帳ゟ昔ハ脇坊十二箇
寺末寺十五ヵ寺有て河野通直の制れ今猶存すと俚諺集見ら

○真善院

齋院村山の林下に在り甲州武田信玄家臣真善坊と云僧四國にて法華經を廣む最澄自作の大黒觀音并身延山三代の曼陀羅を持來りて此寺を造立す其後退轉せしを享保年中道心小庵を結び住るが夢の告有て寺号を現ぬ夫より近村百姓の持傳る曼陀羅を返納しるよ此寺の什物に相違る因て元文の頃一宇を再建す大黒像ハ萱町妙圓寺に秘藏し觀音ハ針田瑞應寺に移し俚諺集に見る

○桑原八幡宮

畑寺村に在り累年の火災に社記燒亡し由来詳ならず天文十一年八月十五日河野通康再興の棟札ありと云

○正八幡宮

小栗村に在て用明天皇元年宇佐より勸請せりと云古今の社地より八町西方に馬場有て鳥居を立し此辺の田地皆神領なりしを天正年中召放し由荏原合戦の時賊社壇を破て社記宝物等悉く奪去て紛失せり

○勝山八幡宮

今市町三宝寺境内に在り何の勸請なるや詳ならず昔八城山の上に在りしを加藤廃築城の時北山の林下に移奉り其後又蒲生忠知朝臣當寺に移し五ひ由俚諺集に見る

254
115

○井手大明神

橋村に在り俚諺集云山州梅宮の勸請なり一古八南方川向に在りと慶長三年今の所に遷座なり舊八五社明神と云社僧八大音寺なり此寺立花山と号す高野山三昧院の末寺にして本尊十一面觀音行基作大宝年中の草創也と云

愛媛面影巻三終